

第五回 e-Learning 研究会報告

中国語授業における e-Learning の実践例——現状と課題

神 谷 まり子*

1. はじめに——中国語授業の現状と問題点

本学2009年度における外国語科目の中国語履修者数は多摩、町田、世田谷・梅ヶ丘の3キャンパスを合わせると合計4050名にのぼる（政経、文、法、理工、体育学部）。うち、中国語履修者には必修の「中国語1・2」（1年次科目）は計1612名であり、履修者の最も多い世田谷・梅ヶ丘キャンパスで開講されている同科目の1クラスあたりの平均は32名、特に2限から4限の最も履修者が集中するクラスでは40名以上である[1]。

外国語科目において一般に理想的なクラスサイズは二十数名程度であると考えられるが、例年の受講者数増加に伴い、その確保が難しくなっている。クラスサイズの増大がもたらす問題点として、例えば教員が文法説明をし、数人の学生に教科書の日本語訳や練習問題を答えさせる、といった一方的な授業運営になりがちであったり、また教員の目が届きにくくなることから「正しい発音が身に付かない」「会話練習をしても正しい表現ができていないかどうか分からない」など、コミュニケーション能力を養う部分において弊害がおきやすい。たとえ教員の説明が理解できたとしても、実際に使うことができない、というのが多くの学習者にとっての現状であると思われる。

これまで大学における外国語教育は、その多くが文法訳読中心、すなわち教師による文法の説明やテキストの訳を行う方法が大部分を占めてきた。それに対し、近年では学習者が習得した語彙や文法知識を実際のコミュニケーションで使えるようになることの重要性が中国語教育の分野でも注目されている。その一環で外国語教育の新たな方向性として、「学校教育の一環から生涯教育の一環へ」「教育者中心から学習者中心へ」「文法」重点から「機能」重点への転換が叫ばれるようになってきた[2]。学習者が自主的に学習を進めることのできるマルチメディア学習の利用は、従来の対面型授業の不足を補うツールとして有効であると考えられる。本稿では、報告者が担当する外国語科目「中国語会話3・4」での実践例を中心に、本学の中国語教育における e-Learning の現状と今後の課題などについて報告する。

2. 中国語教育における e-Learning

中国語教育におけるマルチメディア学習の研究や教材開発は近年では少しずつ進みつつある。初級レベルの教材では、例えば通常のテキストに合わせて付属のDVDでスキット動画、文法説明、会話部分のロールプレイが収録されたものもいくつか出版されている[3]。また、最近ではこれら通常のテキストに加え、専用サイトでの復習やインターネット回線を使ってネイティブの講師とマンツーマンの会話練習が行えるようなものも出てきた[4]。一方、e-Learningのシステム開発の面では、国内の大学機関だけでも東京外国語大学言語モジュール（TUMS）、成蹊大学中国語教育プラン“游”、大阪大学 e-Learning、北海

* 国土館大学政経学部

道大学 Learning Management System (Web Tube) など、数多くの例がある。だが、e-Learning システムはその開発に多額の経費や多くの人材が必要とされ、学内や学生からのみアクセス可能としており、外部には非公開の形をとっていることが多い[5]。従って人材が限られている大学では大規模な e-Learning システムを整備、利用することはほぼ不可能であり、一般に市販された e-Learning システムを導入するか、上記に記したようなオンライン教材が付属したテキストを使用するなどの方法に限られているのが現状である。

大学の外国語教育では従来の視聴覚教育 (Language Laboratory, 通称 LL) を引き継いだものとして CALL 教育が e-Learning よりも先んじて導入されてきた。CALL (Computer Assisted Language Learning) とは、文字教材、音声、動画などのメディアを 1 台のコンピューター上で組み合わせた学習システムであり、インターネットを合わせた高度なマルチメディア学習環境を指す。本学でも町田キャンパス、梅ヶ丘キャンパスに各 1 教室ずつ整備されており、導入以来外国語科目の授業で使用されている。ただし、CALL 教育でもいくつか問題点が指摘されている。例えば、CALL 教室の設置がまず不可欠であり、学生は専用のソフトウェアを導入した CALL 教室でしか学習できないため、運用面において経済的ではないこと、また教員側もコンピューターや付属機器類の操作に習熟している必要があり、事前説明が不十分な場合には効果が得られにくい、などである[6]。本学のように CALL 教室の数に制限がある場合、使用している学生は全体の一部であり、教室が空いていたとしても非常勤教員を多く抱えている外国語科目の場合には利用が敬遠されがちなため、このような問題点は致命的とも言える。インターネットを通じて学内外から自由にアクセスでき、教員が比較的簡単に教材を追加、書き込みできる e-Learning システムの意義が重要になってくると考えられるのである。

3. 「中国語会話 3・4」概要

「中国語会話 3・4」(旧カリキュラム名:「マルチメディア中国語 1・2」) は、政経、法、文学部の 2 年次配当の外国語選択科目である。教室には 34 号館 B609 の CALL 教室を使用し、コンピューターには CALL ソフトウェア (Victor JVC Well V4.0) が導入されている。テキストには DVD および CD が付属した『理香と王麗 話す中国語 2』(朝日出版社)を使用した。毎回の授業の流れは以下の通りである (2009 年度後期の履修者数は 23 名)。

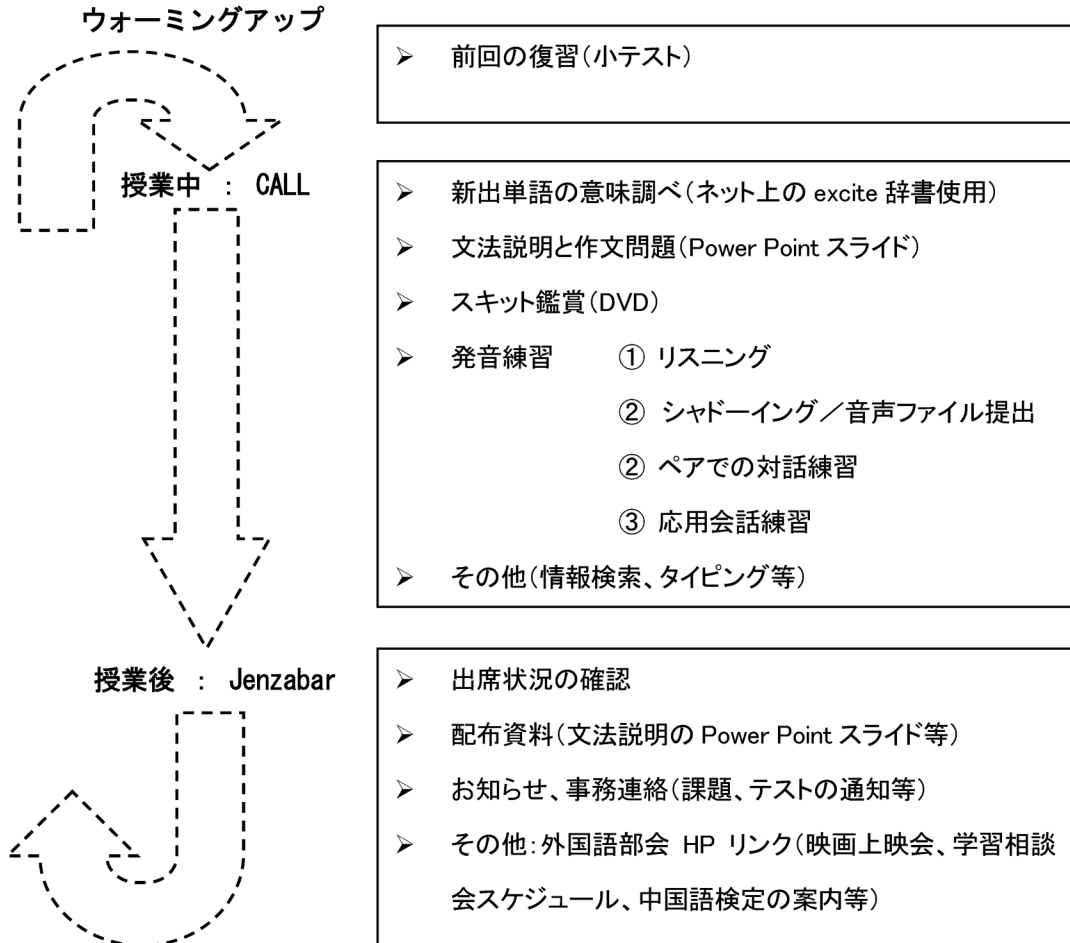


図1 授業の流れ

授業中では主に CALL を使ったリスニングや発音練習，インターネットを使った単語の意味調べや情報検索を行っている。毎回の授業が終了後，e-Learning 講義支援システム Jenzabar に当日の出席状況の入力と授業内で説明に使用したスライドなどを配布資料としてアップロードし，学生が授業外の時間でこれらを確認できるようにした。ただし2009年12月現在，学生によるこれら配布資料のダウンロード回数は一つの資料につき1～4回と，あまり多くなかった。Jenzabar 上の「テスト/課題」は，これまで中文フォントが文字化けするなどの問題があったため，未使用だった[7]。今後はさらなる学生の利用を促すため，配布資料の閲覧・ダウンロードに加え，授業内容の復習に効果的な「テスト/課題」の作成や，授業中の小テスト，学期末テストと連携した資料の添付（例えばテスト内容を一部予習できる）など，Jenzabar での学習が次の授業へ結びつくような工夫が必要なものと思われる。また，音声ファイルによるリスニング練習など，「聞く」「話す」「読む」「書く」の四つの能力のうち，「聞く」「話す」能力の学習に有効な方策を講じる必要がある。

4. 課題：「外国語ポートフォリオ」との連携

前述したように、e-Learning は CALL を使った授業を受講しない学生にも学習環境を提供できるという点で大きな意味を持っているが、その一方で情報の共有は基本的に教員が担当している授業の履修者内に限られている。外国語科目のように同一科目（「中国語 1・2」など初級クラスの場合、テキストは異なっても学習事項はほぼ同じである）で数十クラスが存在するといった場合、学習者全体に向けた情報発信には不十分である。それを補うものとして、国士舘大学外国語部では外国語関連の諸情報を閲覧できるホームページを作成している（<http://homepage.kokushikan.ac.jp/gaikokugo/>）。学生は直接又は Jenza-bar 上のリンクからアクセスでき、外国語履修方法から学習のヒント、各種催しに関する情報を得られるとともに、「外国語ポートフォリオ」をダウンロードすることが可能である[8]。

「外国語ポートフォリオ（国士舘大学外国語学習記録帳）」とは、本学で開講されている外国語科目に関する情報や検定試験等に対応した学習レベル、学習の到達目標等を学生が自由に参照、書き込みできるように考案された記録帳であり、2009年度より新たな試みとして新1年生に配布されている。なかでも今後 e-Learning との連携を模索したいと報告者が考えているのが、「外国語別チェックリスト」である。これは外国語別に授業に対応した「レベル1」から「レベル4」又は「レベル6」まであり、到達目標の学習項目について確認できる仕組みになっている（図2 参照）。現在ではあくまで学生の自己診断にまかせているが、Adobe Captivate 4 などを使用したコンテンツを作成することにより、チェックリストの学習項目に対応した問題をクイズ形式で学生がいつでも自由に自己採点、間違った箇所を復習できるシステムを作成することが今後の課題である。

中国語 中文			
レベル1	☺会一点儿	☺不错	☺很棒!
ピンイン表記をだいたい発音することができる			
四声を正しく言うことができ、また聞き取ることができる			
自分の名前を中国語でたたく発音でき、また簡体字で書くことができる			
“你好”“再见”“谢谢”などの簡単なあいさつのやり取りができる			
“我”“你”などの人称代名詞を使うことができる			
名前や出身、所属などのごく基本的な事柄について、やり取りができる			
数字や年月日、年齢など、数を使った表現を言うことができ、また聞き取ることができる			
“去”“看”などの基本的な動詞や、形容詞を使った文を作り、読むことができる			
簡体字を使って短い自己紹介文を書くことができる			

図2 「外国語ポートフォリオ」チェックリスト 中国語・レベル1

5. ま と め

インターネットによって海外から生の情報が自由に入手できる時代、外国語科目におけるマルチメディア学習の活用は今後ますます重要になってくるとと思われる。今回の報告では CALL 教室を利用した授業を中心に検討したが、一般の授業において e-Learning システムを広く利用してもらうためにどのような方法が有効なのか考えていく必要がある。また、「外国語ポートフォリオ」は2010年度より新2年生の授業での使用が開始されるため、上記に報告した「中国語会話3・4」の授業での試用状況やコンテンツ運用方法などについても検証し、また機会があれば報告したい。

注

- [1] 2009年度外国語履修者数（教務課資料，5月11日）。「中国語1・2」2～4限の1クラス平均数は，初回ウェブ登録者数による（教務課資料，4月11日）。
- [2] 胡玉華著『中国語教育とコミュニケーション能力の育成』東方書店，2009年，21頁。
- [3] 『理香と王麗 話す中国語2』董燕，遠藤光暁著，朝日出版社，2006年，『中国語 新天地1』『中国語 新天地2』小川利康，王延偉著，朝日出版社，2009年。
- [4] 『ぼくのせんせい——中国語しゃべるねっと倶楽部』Live China 講師グループ，郭雲輝著，朝日出版社，2006年。
- [5] 東京外国語大学言語モジュール（TUFs）は学外からアクセス可能であり，一般公開されている（<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/index.html>）。
- [6] 李偉「e-Learning による外国語教育の展開——Blackboard Learning System による中国語教育の事例を中心に」『久留米大学外国語教育研究所紀要』15号，2008年3月。
- [7] 国土館大学情報科学センター寺田さゆり氏の御尽力により，その後文字化けの問題が解決されたとの連絡を受けた。この場を借りて感謝を申し上げたい。
- [8] 平成20年度国土館大学特色ある教育・研究支援プログラム「学習者中心主義に立った外国語学習環境整備」（代表者：鷺巣由美子）の一環として作成，外国語部会ホームページよりダウンロードが可能である（<http://homepage.kokushikan.ac.jp/gaikokugo/portfolio/portfolio.html>）。